

## 近世における立山名所の形成に関する試論

高野 靖彦

### はじめに

近世は、旅の民衆化が始まった時代である。新城常三氏は、近世における寺社参詣の特徴として、すでに中世において現出していた「交通環境の好転」「御師・宿坊の発達」にくわえて「民衆の上昇」「参詣の遊楽化」「乞食参詣の横行」「講の発展」「封建的規制」を列挙している。<sup>1)</sup> さらに「参詣の遊楽化」の目安として享保期を掲げており、近世史内部における段階的把握に対するひとつのモデルを提示している。

近世中期、おそくとも享保期までには、地獄・浄土の山で知られた霊山・立山にもこうした歴史的潮流が押しよせてきていたはずであり、紀行文の増加などから、その一端を窺うことができる。たとえば、准后道興などの修験者や行者、僧侶が階層の中心であった立山に天和3年(1683)、文人・大淀三千風が来訪していることから、禅定人の階層拡大が生じていたことが窺え、その数も増加していたことは想像に難くないのである。

ところで、近年盛行している名所論において、青柳周一氏は「観光地域史」を標榜し、近世における大量の旅人が聖地・名所を訪れることで、地域社会とそれを取り巻く環境にいかなる変容をもたらされたのかという問題意識で富士山麓における宗教村落間の事例を検証している。<sup>2)</sup>

そもそも名所とは、歌枕に読まれた「ナドコロ」を基点として、近世には都市文人層が競って訪れた場所であるが、そうした名所や歴史的背景をもつ旧跡が近世初期に再発見されていく現象を見出すことができる。他にもそれまで平凡であった場所が地

域で名所として生成されたり、何らかの理由で注目を浴びた場所が名所として生成されていくケースもある。すなわち、こうした名所の再生・生成は、すぐれて近世的な現象のひとつである。かような「近世的名所」を、本稿では名所と称することとしたい。

名所論では、誰が、どのような目的で名所を再生・生成していくのかということも論点ではあるが、青柳氏が提示しているように、旅の民衆化によって地域社会にいかなる社会的変容をもたらされるのか、という論点もすこぶる重要である。かかる問題を立山という名所に置き換えたならば、禅定人の身分的階層の拡大をうけて、そうした人々を迎える必要に迫られた側、具体的には立山山麓の宗教村落である岩峠寺・芦峠寺を指すが、そこにもたらされる社会構造および立山山中の変容を捉えることが求められる。この点において立山の研究事例では、芦峠寺で行われた女人救済儀式である「布橋灌頂会」が文政期から再構築されていった社会的背景を検討した事例がある。<sup>3)</sup> あるいは「略縁起」生成の観点から文化期に整備された立山温泉の経営と女人禁制の関係論を論じたものもある。<sup>4)</sup> しかし、その他では管見の限り、先行研究が少ないと思われ、殊に岩峠寺衆徒<sup>5)</sup>が管理していた立山山中への影響については未だ着手されていないのが実情であろう。

そこで本稿は、立山山麓の宗教集落の変容はひとまず措いて、近世における旅の民衆化により立山山中にいかなる変容が生じたのかを、管見される史資料を手がかりとして、延宝～正徳期の動向を中心に行うことができる限り捉えようとするものである。いまのどこ

る筆者は仮説として、近世中期の立山では、旅の民衆化を主因として、あるいはそうした外的要因のみならず宗教村落内の経済的要請から、立山山中が名所として急速に再構築されていくのではないかと想定している。その意味において本稿は、地域社会論的立場で立山の変容を理解することを目指しており、青柳氏の標榜する「観光地域史」に沿ったものである。

## 1. 近世前期における立山禪定人

近世前期における立山禪定人の数的把握を行う場合、史料制約があり、きわめて困難な状況であるとはいえ、立山禪定人の時期的傾向については幾つかの先行研究がある。<sup>6)</sup>ここではそうした成果に学びつつ、近世前期における立山禪定人の諸相について概観しておく。

寛永元年(1624)、加賀藩主前田利常が立山足倉中宮寺に出した禁制に「号禪定、猥ケ間敷喧嘩口論事」とみえ、階層は明瞭ではないが、立山禪定人がある程度存在していたことが窺える。この時期の立山禪定人は主に宗教者であったと考えられる。時代は下るが、延宝8年(1680)～元禄4年(1691)に加賀藩曹洞宗大乘寺の卍山道白が立山禪定を行っている。宝永6年(1709)には近江の栢応が立山山中の室堂で七日間の参籠を行っている。また正徳元年(1711)以前から廻国六十六部がある程度納経に訪れていることが窺える。

他方で農民・商工人といった民衆による寺社参詣旅は元禄期(1688～1704)以降に増加し、それ以前には民衆の旅は少ないとされるが、必ずしもそうとは言いきれない。万治3年(1660)刊、鈴木正三『驢鞍橋』という勸化本には「此比知多ノ郡ノ者七、八人、越中ノ立山ニ参リケルニ」とみえ、唱導話材と

るといえる。

また本稿は、近世中期における立山名所形成についての試論ではあるが、立山の「観光地」化が近世から近現代へどのように推移したのかという視座をもちながら、かかる試みを積み重ねることで、観光地・立山に関する歴史的特性の理解を深めていこうとするためのものである。

して取り込まれるほど、万治年間にすでに尾張知多郡から立山禪定が行われていたことを窺うことができる。<sup>7)</sup>同じく寛文元年(1661)刊『因果物語』にも「尾州山崎ヨリ。寛永十六年ノ夏同行十人立山江参詣ス」とあり、寛永16年(1639)尾張方面からの禪定人が、ある程度存在したことが窺知される。また延宝4年(1676)、尾張小鈴谷村の盛田久左衛門なる商人が、富士山・白山・立山の三山を巡る「三禪定」<sup>8)</sup>を果たしていることが知られる。

天和3年(1683)6月には俳人・大淀三千風が、元禄9年(1696)神道家・橘三喜が立山禪定を果たし、各々紀行文を遺している。<sup>9)</sup>

さらに正徳期以降では、次第に廻国行者や民衆による立山禪定の記録が増加してくる。正徳元年(1711)、信州松本壺本木村から12名が来たのをはじめとして、正徳5年(1715)、奥州南部大畑新町の太郎七、下野国芳賀郡古山村の常念、享保7年(1722)越後国魚沼郡仙田村の六兵衛などが立山禪定に来ている。

こうして概観すれば、近世前期においてもあくまで宗教者が禪定人の中心ではあるものの、それ以外の階層も少なからず立山禪定を行っていたことがわかる。

## 2. 近世前期における立山山中の状況

本稿で扱う「立山山中」とは、立山禅定道およびその周辺山域のことである。すなわち藤橋～立山三山・地獄谷までの山域を指す。それは近世における禅定道の整備と立山名所の形成が相関していると考えられるからである。

そもそも立山禅定とは、立山信仰をもとに立山に登ることである。ただし宗派仏教的な修行を指すのではなく、立山に登ることで山中において種々の行法を修めることであり、そうした修行ルートが中世には幾つか存在したと思われるが、近世には山中の禅定道が固定化したとされる。

近世前期（元禄期以前）における立山山中の状況を記した史資料は管見の限りでは少ない。例えば、正保4年（1647）、幕府が各藩に提出させた国絵図についても、加賀藩では前年に作成された郷帳（下帳は「加越能三ヶ国高辻帳原稿」）をもとに絵図が作成され、その控図も基本的には村名、主な道路・河川の記載が中心であり、山中名の記載は殆ど見られない。<sup>10)</sup> 続いて、延宝6年以降に作成されたとみられる加賀藩独自の国絵図「越中國四郡繪圖（通称：延宝の国絵図）」<sup>11)</sup> には、黒部奥山踏査の情報をもとに、幾つかの山中地名の記載が見られるようになる。こうした奥山廻り記録をはじめとする諸資料を総合すれば、ある程度は当該期における山中の状況を窺い知ることができよう。

### 2-1. 岩嶽寺文書にみる立山山中の状況

管見によれば、近世における立山山中の状況を記載した史料的初見は、元和7年（1621）11月付、岩嶽寺多賀坊文書所収の「末社因縁書上ル帳」であろう。同史料はすでに高瀬重雄氏により翻刻されているが、<sup>12)</sup> きわめて貴重な史料であるので再翻刻しておく。

[史料①]（読点は筆者による 以下同じ）

- 一、谷之地蔵堂有、九尺四方ニて御座候
- 一、池之地蔵と申候而堂有、九尺にて、是かんのちこくの奉行ニて御座候
- 一、追分の地蔵堂、これも九尺四方、極閑地ごくとがにヨリ、をいわくるミちニ御座候
- 一、いちの谷と申候て、九尺四方之堂有、これハ立山のかいさんにて、ごまを御たき被成堂にて御座候
- 一、なかつ原と申而、一間四方ノ堂有、本尊ハ観音ニて御座候
- 一、不動堂之社とう、一間四方ニて御座候
- 一、不動堂の前殿、三間四方之堂ニて御座候
- 一、からきのまえたち、此堂一間四方、本尊ハ屋くし如来
- 一、ち原と申候而、一間四方之堂、本そんハ観音ニ而御座候
- 一、大小屋と申て、立山ごんげんの小屋場ニて御座候
- 一、わしのいわ屋と申而、立山権現の材木奉行ニ而候、これニよつてさい木坂と申なし候
- 一、ゆのまたの千じゅ堂有、一間四方、本尊千手観音也
- 一、ちの池と申而、一間四方也、是ハ女の血ふんきやう納堂ニ而御座候
- 一、玉殿のいわ屋と申而、其内ニ一間四方之堂御座候、是ハ立山ごんげんのはしまり被成いわ屋ニ而御座候、又極楽と申而阿弥陀堂御座候、九尺四方ニ而御座候

此外の諸堂御座候へ共、あらましの分書付指上申候  
元和七年十一月 日

立山寺惣中（印）

進上

御奉行様

本史料は、立山寺衆徒が寺社奉行に上申した書帳の控である。立山寺とは岩峯寺の旧号で、元禄15年(1702)12月の書上には「岩峯寺ヲ立山惣名与申義御尋有之、委細之義不奉存候、岩峯寺先年ハ立山立山寺与申処、利長公御代ニ寺号紛敷候条、替申様ニ被為仰付、衆徒二十四坊罷在候、在所岩峯村与申ニ付、岩峯寺与寺号改申」とあり、藩主・前田利長の代に改号したとされる。<sup>13)</sup>

この書上には、具体的な立山山中の地名が記載されており、追分、いちの谷、なかつ原、ち原、わしのいわ屋、ざい木坂、ゆのまた、ちの池、玉殿いわ屋を列挙できる。おそらくこれらの地名は、元和期にはすでに知名度の高いものであったと想定されよう。

さて末社とは、立山権現社の末社のことで、高瀬氏はこれらの堂舎が木材による建築物かどうかは不明であるとしているが、規格的な寸法が記載されていることから、これらが建築物であると捉えて差し支えないであろう。この書上によれば、山中の堂舎は、①谷の地蔵堂(九尺四方)、②池の地蔵堂(九尺)、③追分の地蔵堂(九尺四方)、④いちの谷の堂(九尺四方)、⑤なかつ原の堂(一間四方)、⑥不動堂の社とう(一間四方)⑦不動堂の前堂(三間四方)、⑧からきのまへたちの堂(一間四方)、⑨ち原の堂(一間四方)、⑩ゆのまたの千じゅ堂(一間四方)、⑪ちの池の堂(一間四方)、⑫玉殿いわ屋内の堂(一間四方)、⑬玉殿いわ屋内の阿弥陀堂(九尺四方)である。他の建築物として⑭大小屋(寸法記載なし)がある。

また「此外の諸堂御座候へ共、あらましの分書付指上申候」とあることから、この他にも堂舎があったと思われる。立山末社については、延宝3年(1675)の岩峯寺由来書に「先年者、八十末社、坊数七千之所ニ而御座候へハ、今程者、六十六社、二十四坊ニ而御祈禱勤申候」とあり、延宝期には66末社が存在している旨を加賀藩寺社奉行へ報告している。

また元和期における立山山中の最大の建築物とし

て不動堂の前堂が挙げられる。三間四方(約5.5m)とあることから山中の堂舎としては比較的大きな規模である。その他の堂舎は九尺~一間(約1.8~2.7m)程度の規模であったことが窺える。

さて、次に管見に入るものは、貞享3年(1686)立山禅定道の道刈料についてのものである。

[史料②]<sup>14)</sup>

請取申立山道刈料之事

合金子式歩

右者、立山道刈美女杉よりぶな坂迄、耆里ノ道刈、當刀ノ年耆作道刈可仕候、以上

立山別當

岩峯寺

貞享三刀年六月九日

濃州武儀郡牧ノ内蔵生村

後藤平右衛門殿

これは濃州武儀郡蔵生村の後藤平右衛門が道刈料として金子式歩を寄進した請取状であり、美女杉<sup>15)</sup>とぶな坂の地名が記載されている。貞享期すでに、立山禅定道の維持管理費用が問題となっており、有志による寄進行為などで道刈の経費が賄われていたことを示しているものと理解されよう。

## 2-2. 奥山廻り記録にみる立山山中の状況

奥山廻り記録には、黒部奥山(御縮山)の把握・巡視という加賀藩「奥山廻り」御用の特性<sup>16)</sup>から具体的な山名・川名・道程が記載されており、当該期における山中状況を窺い知ることができる。ここではその幾つかを見ていく。

[史料③]<sup>17)</sup>

奥山廻役喜左衛門記録

慶安元年六月二十八日芦峯寺姥堂ノ垣ノそと方寒谷田ノ下迄メ九百六十間

右之所る大窪坂ノ内ハ百間也

- 一、三百四拾間ハ大崩坂ノ内  
 一、百六拾間ハ大崩坂ノ内牛ケくひ坂ノ下迄  
 一、式拾間ハ牛ケくひ坂ノ内  
 一、参百間坪野ノ宮ノ平也  
 一、式百間ハ平岩也  
 一、式百間ハ平岩おり内ハ正明川端迄  
 一、百六拾間ハ川原ノ内、但右ノ川原川上へ少シ登ル也、此角倉余程ノ平也  
 一、六拾間 材木坂ノ下  
 一、式百六拾間 横積立詰まで  
 一、百四拾間ハ右立詰ハわしが岩屋迄  
 一、式百間ハ熊野ノ宮  
 御姥堂いかきノ外方  
 ||||| + ||||| + ||||| + ||||| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
 ||||| + ||||| + 寒谷田之下迄、| + |||||  
 ||||| + 大窪坂ノ下迄、||| 坂ノ内、||| + |||||  
 ||||| + || 大崩坂ノ内牛ケくひ坂ノ下迄、| 坂ノ内、||| + ||||| + 坪野ノ平、| 平岩、| 正明川端、| 十川ノ中、||| 右川原ノ内、|| 金坂ノ下迄、+ | 金坂ノ内、但此所ふる堂共云、但宮迄、||| 角倉ノ平、材木坂ノ下迄、||| + ||||| 横積立積迄、|| + ||||| わしが岩屋迄、| 熊野ノ宮、| 是迄坂也、| 是ハ平也、|| + ||| 美女杉迄、| | 美女坂、||| + ||||| + しかりばり、|| ||| 大こやの宮、||| + ||||| + ||| 但とや平といふ所ハぶな坂ノ下へ馬疋成可申与見立置申候、| 此所ぶな坂ノ下成、此内四繩ぶな坂也、其外ハ平也、||| + ||||| + ||||| + 平、||| ||| + 平也、| ヤせ尾、||| 平也、伏拝ミ、十坂、| 平、||| 知原堂、| 十平、||| || 桑ヶ谷、| 下り目ニ小平道、+ | 桑谷ノ内川登リ、||| 河登リ、| 坂也、是ハ弥陀の原ノ内、|| ||||| + 同之内、||| + 同ノ内、||| ||| + | 不動堂也、||| + ミたか原の内、||| + 同、||| + 同、|||

| + 同、||| + 同、|| 同道こけ場、||| + 同、||| + ||| 此所松尾江入口（後略）

この記録は、慶安元年（1648）、藩主前田利常の命をうけて大島甚兵衛ら加賀藩の役人が、芦峯村の三左衛門らと共に芦峯寺姥堂から針ノ木峠を越えて信州野口村馬留までの道筋と距離を測量したものである。このあと松尾方面から「浄土山ハ出ル谷川」へ出て、「ざらの峠の峯」を越えている。これは立山山中の「さらさら越え」踏査の道筋を示すものとして知られているが、「松尾江入口」（追分周辺）までの地名や堂舎名を記しており、貴重な記録であるといえよう。この踏査では、道筋と距離を重視しており、記号|は20間（約36.4m）、+は40間（約72.8m）を示しているとみられる。

平岩（正明川端）から松尾まで、固有名のない平・坂などの地形・地勢を表す語を除くと、次のような地名となる。

平岩 → 金坂（ふる堂） → (宮) → 角倉ノ平、  
 材木坂 → 横積立積 → わしが岩屋 → 熊野ノ宮 → 美女杉 → 美女坂 → しかりばり → 大こやの宮 → とや平 → ぶな坂 → 伏拝 → 知原堂 → 桑谷 → 弥陀の原 → 不動堂 → 松尾（入口）

慶安期には、すでにふる堂、熊野ノ宮、大こやの宮、知原堂、不動堂という建築物が存在していたことがわかる。このことは先に見た「末社因縁書上ル帳」の記述とも相反していない。なお横積立積というのは、材木石（安山岩の柱状節理）のことであろう。また、測量のための行程とはいえ、すでに山中にこれらの地名を結ぶ道もしくはルートがあったことを窺うことができる。ただ、後に開山縁起との関わりで名所とされた「小金坂」が金坂と記載され、女人禁制の名所とされた「かふる杉」が記載されて

いない点は押さえておきたい。

下って天和2年(1682)の記録<sup>18)</sup>では、くは谷、もろう堂(室堂)が宿泊場所として記載されている。元禄5年(1692)の記録<sup>19)</sup>では、岩嶽村、千垣村を通過して、材木坂、たんか原、もろ堂(もろとう)の宿泊場所のみを記載し、立山山中の記載は簡易なものにとどまる。このことは延宝～元禄期において、国絵図(元禄14年幕府へ提出)作成の主目的である領境の確定のため、黒部奥山境目の見分が中心となるためである。そのため元禄10年(1697)の記録<sup>20)</sup>にも、立山室堂、みくりか池、みとりが池といった地名しか記載されておらず、殆ど領境地名の記載が中心となる。宝永7年(1710)の記録<sup>21)</sup>にも、千垣村を経て宿泊場所である、平岩、室堂の記載しかみえず、天和～宝永期の立山山中の状況を奥山廻り記録から捉えるのは制約が大きい。

しかるに、続く正徳期では、先の奥山任務が終了して再び立山山中の状況に注意が向けられ、詳細な地名が記載されるようになる。それらは奥山踏査の成果が反映され、情報が詳細になっているとともに地元の情報による地名の由来が記載される。すなわち山中における名所案内の様相を呈するようになり、注意を要するのである。いささか煩雑ではあるが、史料翻刻文を掲げておく。

[史料④]<sup>22)</sup>(下線部は筆者による 以下同じ)

(前略) 岩嶽寺村

此間道程壺里

横江村

此間道程壺里

千垣村

但、岩嶽寺方千垣村江参ニ、横江村松林ノ内通、此間道程壺里

芦嶽寺村

但、千垣村方芦嶽寺村江参ニ、さんつ川、四手ノ山越、次ニ六地藏有

姥堂

芦嶽寺山 下ヶ谷

同 さぶ谷

同 ねふの木峠

同 大崩山

平岩

但、平岩方正明川を越、小金坂登り、右手ハ湯川、両川落合わに口与申候

正明川

小金坂

壺番横積

式番立積 材木坂

此所堂有 熊野権こんけん

但、女上杉 ひせう坂

有 かふろ杉 木有

但、此次ニしかりばりと申あな有、但此あなハ姥のしやうへんあなノ由

ぶなの坂

此次ニおふこやと申所有、即杉ノ木大木壺本有、四方へ枝さかへ居申候

ふしおかみ

但、此ふしおかみ方正明ノ瀧相見申

桑ヶ谷

但、此所水有、立山上下ノ者共昼食場

此所堂有

千原権現

不動堂

弥陀ヶ原野

此野内右手ニ石地藏有、夫方立山湯江参り、則湯道松尾坂下り

一ノ谷追分

但、左り手一ノ谷道、右手ハ姥ヶふところ道、此所ニ右、左り道境ニ金仏地藏有

松尾坂

鏡石

下市場

但、下市場ニ而一ノ谷道手合

地獄追分

但、左リ手ハ地蔵道、右ハ室堂道

室堂ノ下手ニミくりか池、みとりか池有、夫ハ地獄谷、又夫ハ北ノ方ニさいノ川原有リ

室堂

但、室堂ハ出、立山登リニ六道有、但左リ手ノ岩矢がたまとの岩矢有、右手ハ浄土山、夫ハ弘堂有

一ノ越

二ノこし

三ノこし

四ノこし

五ノこし

但、此五ノ腰九品浄土与申なり<sup>23)</sup>

メ

浄土山（後略）

[史料⑥]<sup>24)</sup>

是ハ当宗兵衛留書写置也

岩嶽寺村 但、岩嶽寺ハ横江村迄道程壱里則松林ノ内ヲ通ル也

横江村

千垣村 但、横江ハ千垣村迄道程壱里此間にオノ川原有リ

芦嶽寺村 但、千垣村ハ芦嶽迄参ル内ニ三津ノ川、四手ノ山、則山ノ内六地藏御座候

御姥堂 但、姥堂ノ前ニ無明橋有、両方ノ詰ニ杉ノ大木有、橋ノ長サ貳拾五間、板ノ数百八枚、橋幅九尺ぎほし六つ

下ケ谷山

寒谷

合歛木峠

大崩山

但、下ケ谷、平岩、正明ケ川端迄、芦嶽寺村山事、材木坂、平岩、湯川端茂芦嶽寺作場候、右平岩与申所ハ正明川を渡リ越申、夫ハ小金坂江登リ右ノ方ハ

湯川、左ノ方正明川落合常願寺川と申也

小金坂

材木坂

但、材木坂壱番横積、貳番立積、寔ニ材木之ことく也熊野権現 但、堂アリ

鷲ケ岩矢 同断

美女坂 但、美女杉と申杉あり

かふる杉

しかりはりと申穴あり、但此穴ハ姥小弁いたされたるに付、金輪際迄通申穴と申也

蒲名坂 但、此ふなか坂次ニ大小屋とか申而、則杉の大木壱本 但大概の雨ハしのみ申所也

此間、伏拝と申して正明ノ滝ヲ詠かめ申所也

桑ケ谷 但シ、此之桑谷ニ水有、立山参詣上下共中食所也、右ノ所古来茶屋無キ所ニ候へ共、正徳四年ニちや屋ヲ掛、あらめ汁、美酒坏も売申候

千原権現

不動堂

但、此野内右手ノ方ニ弥陀ヶ原野、石地藏有、夫ハ立山湯江行道松尾坂壱里、同水谷与申間壱里下リメ式里ノ間下リ成、水谷至極難渉難義仕申所也、それハざら谷川ニ付申

一ノ谷追分 但、左手ノ方ハ一ノ谷、右ノ方ハ姥ケ懐道、此道地藏有、金仏也

松尾坂

鏡石

下市場 但、此下市場ニ而、一ノ谷道出合

地獄追分 但、左リ手方ハ地こく右手ノ方ハ室堂道也室堂

但、室堂下方ニミくりか池、みどりか池と申池二つ有、此池ノ間ニ道有、夫ハ地こく谷へ行、じこくノ地藏有、金仏也

右室堂ハ出、立山へ参ルニ道六堂有、左手ノ方ハ浄土山、夫ハ立山道一ノ越迄登ル、さんげ坂其頭ニ弘堂、此堂ノ下ハ水出申、是ハ一ノ越坂也

浄土山（後略）

〔史料④〕は正徳2年（1712）のものである。〔史料⑤〕は、後略した部分である文末に「此外度々覺書有之候得共、年々相替り可申候ニ付写不申候、則本江ノ両帳ニ有之、入時々本江方かり可申候也」とあることから、奥山廻の太田本江村宗兵衛から齋木村有度が帳面を借り受け、写したものであることが判明し、その時期は他記載から正徳5年（1715）以降である。ただし、記載内容そのものは帳面を写した以前、すなわち正徳5年以前のものであると考えてよいであろう。両史料とも、出発点を岩嶮寺村としており、それまでは東岩瀬、芦嶮寺、千垣村などと出発点は一定していなかったが、正徳期以降に上奥山廻りの出発点が岩嶮寺村となったことには何らかの社会的背景があるように思われる。

さて、下線部で示したように正徳期の段階では新たに「しかりばり」という地名に対して言説が付されている。さらに「かふろ杉」「鏡石」も新たに加わり、女人禁制の言説とともに、これらの名所が再編・整備されたことが想定されよう。「かふろ杉」については、大小屋周辺にも杉大木があり、「四方へ枝さかへ居申候」とあることから、美女坂の「かふろ杉」に似た杉木であったことが窺える。当該期には、すでに中世において女人結界の標であった立山杉の巨木や巨岩の奇観を名所として位置づけ、世情を取り込みながら新たな女人禁制の言説を再構成したのではなかろうか。

なかんずく正徳期における立山山中の変容は「桑谷」において如実に表れている。桑谷は山中のほぼ中間点に当たり、奥山廻では宿泊地とされてきたところであるが、この記載から桑谷はすでに禅定人の昼食（中食）の休憩場所となっており、正徳4年（1714）には「茶屋」が設置されて汁物や酒が販売されている。このことは、当該期において、立山山中に来訪する禅定人の多様化するニーズに応えたも

のであり、立山禅定の世俗化に伴う受入態勢の整備の一環であると捉えることができよう。

2-3. 国絵図・奥山絵図にみる立山山中の状況

それでは奥山廻り記録では判然としなかった延宝～元禄期の立山山中は、絵図類にはどのように描かれているのであろうか。ここでは、管見に入るものとして①「越中國四郡繪圖（通称：延宝の国絵図）」<sup>25)</sup>、②「立山ザラ越之圖」<sup>26)</sup>、③「立山禪定並後立山黒谷等繪圖」<sup>27)</sup>をとりあげて見ていく。

① 「越中國四郡繪圖（通称：延宝の国絵図）」

本絵図〔図1〕は、慶安～延宝期かけて算用場奉行・津田宇右衛門が担当して藩の内部資料として作成された藩独自の国絵図である。先に作成され幕府に提出された「正保の国絵図」には見られない、立山禅定の道筋や奥山の川筋・池などが詳細に描かれている。

すでに吉井亮一氏が指摘しているように、延宝6

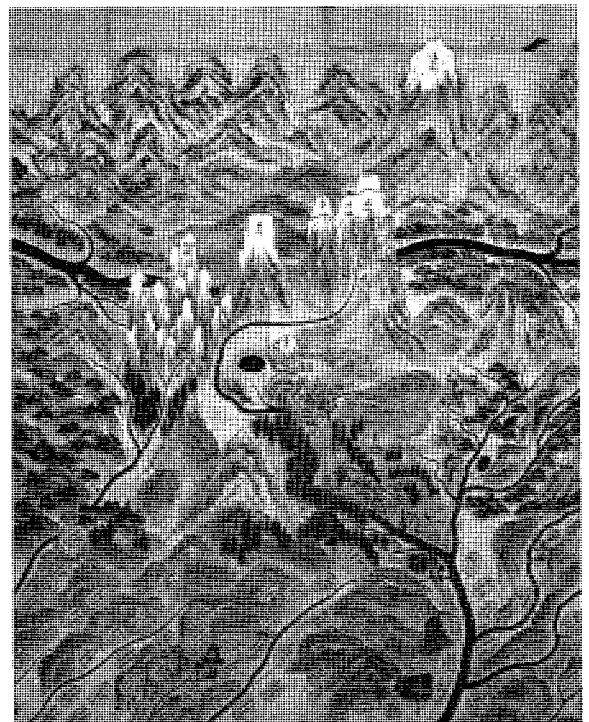


図1 越中國四郡繪圖 部分

（「加越能三箇国絵図の内、通称「延宝の国絵図」、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）



年4月に本絵図の作成準備がようやく整い、そこから作成されたとしても国絵図の作成には2～5年を要することが知られ、おそくとも本絵図の原図は貞享期には成立していたと推測されるが、本稿ではひとまず延宝6年以降に作成されたものと把握しておきたい。だとしても、本絵図は元禄期以前の立山山中の状況を示したものである。

この絵図には、近世の絵図に多くみられる赤線の道が記入されており、禅定道が明瞭に描かれている。たとえば、一ノ谷道と姥懐道の分岐、立山・御汝・富士（折立）・別山山頂への廻峰、別山からの大はしり・小はしり、地獄巡りなど、当該期の禅定道が示され、すでに延宝～貞享期には、こうした禅定道が確立されていたことを窺い知ることができる。また建築物として不動堂が大きく描かれており、先掲の「末社因縁書上ル帳」の記載とも相反していない。室堂は3棟、はらひ堂は2棟の存在を確認できる。他方で、浄土山への登拝道は描かれておらず山上にも堂舎が見当たらない点を押さえておきたい。この時期に桑谷にも休憩所は見えず、材木坂の上には「たんか原」という地名があるのみである。

ところで本図のなかで図像として誇張されているのは、地獄谷、みくりか池もさることながら、玉殿岩屋ではなかろうか。玉殿岩屋は、近世開山縁起における重要な聖地とされる場所である。管見によれば文献上の初見は、「末社因縁書上ル帳」（元和7年（1621）11月付）にみえる「玉殿のいわ屋と申而、其内ニ一間四方之堂御座候、是ハ立山ごんげんのはしまり被成いわ屋ニ而御座候」の文言がそれである。

## ② 「立山ザラ越之圖」

本絵図は、詞書から原田又右衛門なる人物が『日本道之記』を造るために新川新庄村十村・庄左衛門に依頼して水須村山三郎の情報を得て作成されたものであることがわかる。成立年代・背景は諸説あるが、かような黒部奥山の状況を盛り込んだ絵図を一度の踏査で作成したとは考えにくく、本稿では米原

寛氏の論考<sup>28)</sup>を是認した上で、原図成立の時期を元禄11年（戊寅）頃と推測しておきたい。

さて、本絵図は軸裏の題箋に「立山ザラ越之圖」とあるようにザラ峠を越えて越信間をむすぶ、いわゆる「さらさら越え」を示したものである。従って立山山中の記載はさほど詳細ではなく、たとえば、一ノ谷道と姥懐道の分岐は本図には描かれていない。

ただし、山中途中にある不動堂、熊野権現が記されており、先掲の慶安元年（1648）奥山廻役喜左衛門記録と一致していることを確認することができる。また赤線で立山御前から別山への廻峰道が記されており、先の絵図と同様、浄土山への登拝道は描かれていない。

## ③ 「立山禪定並後立山黒部谷等繪圖」

本絵図〔図2〕は、表紙題箋に「立山禪定並後立山黒部谷繪圖」とある。また画面右上角には「元禄十三年四月 立山禪定並後立山黒部谷等繪圖」とあり、これを内題と見做して史料名とする。作成者は新川郡山廻り内山村三郎左衛門、太田本江村宗兵衛、下梅沢村市郎右衛門の3名であり、「元禄の国絵図」作成において現地を踏査した絵図方兼帯の者であり、本図は国絵図作成との関連が深いものであろう。

ただし、内題にある「元禄十三年四月」が原図の成立年かどうかは検討の余地がある。手がかりのひとつは桑谷の状況である。本図では、山中途中の桑谷に「休所」として建築物が見え、仮にこれが「茶屋」であるとすれば、先の太田本江村宗兵衛の覚書にあるように「茶屋」の設置は正徳4年（1714）であった。これが正しいとするならば、原図の作成は正徳4年以降となる。しかるに、「茶屋」は販売所であることから、単なる「休所」とは異なる施設であった可能性もある。その場合は、先に「休所」がつけられ、それが「茶屋」としての性格をもつようになったのが正徳4年とも考え得るのである。そこで本稿では、ひとまず原図の成立時期を元禄13年（1700）以降としておきたい。

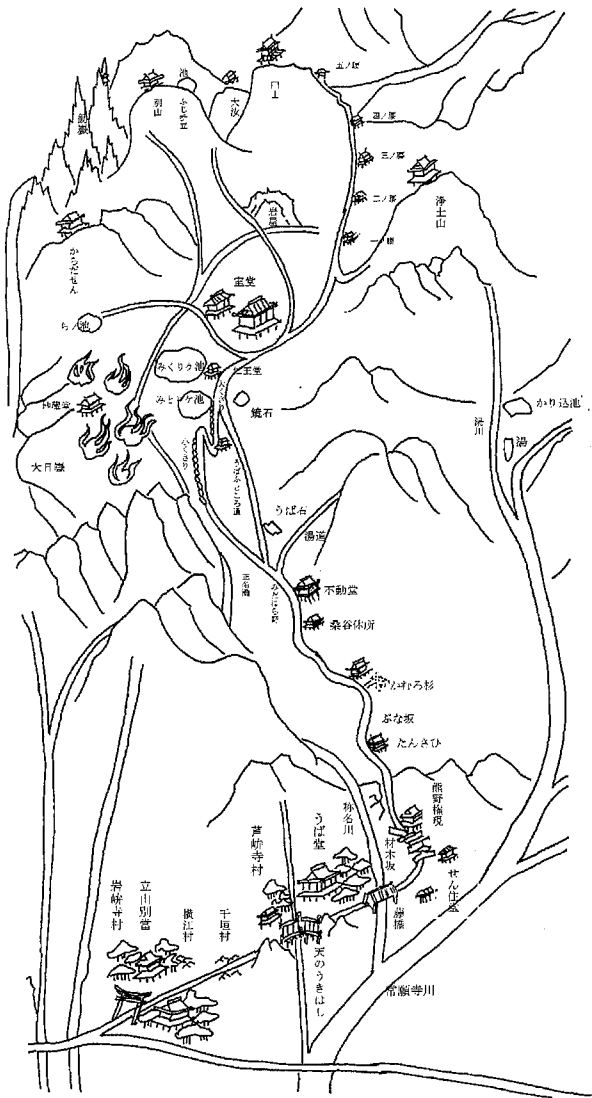


図2 立山禪定並後立山黒部谷等繪圖 部分  
 (富山県立図書館「中島文庫」蔵、  
 トレース図は野中一美氏による)

さて、本図では黒部奥山の山名はもとより、立山山中ルートが明瞭に示されている。美女杉は記載されていないが、女人禁制の標である、かふろ杉・うば石・鏡石が描かれている。但し本図ではぶな坂上の「大小屋」付近の杉大木を「かふろ杉」としており奥山廻り記録とは齟齬が生じている。また室堂には2棟の建造物、ちの池、岩屋（玉殿）は誇張して大きく描かれている。

そして浄土山に目を移すと、浄土山への登拝道があり、山上に堂舎も描かれている。原図の作成時期が元禄13年以降だとすれば、浄土山への登拝道は元禄末期以降によりやく整備された可能性もあろう。

建築物では桑谷休所のほか、みくりか池の仁王堂、からだせん上、たんさい（断罪坂）にも堂舎らしきものが描かれており、山中の建築物が増えている。むしろそれまで全ての堂舎が描かれていなかった可能性もあるが、これらの堂舎名はこれまで文献上に現れておらず、当該期における堂舎数の増加を示していると見做したほうが適切であろう。

本図では藤橋に四方に桁をもつ掛橋が描かれている。図像の正否は別に検討を要するが、このことは元禄末期までに称名川の渡り場が整備され、以前よりも渡河が容易になったことを誇張して描いたのではなかろうか。要するに本絵図では「立山禪定」と内題にあるように、奥山廻り絵図でありながらも禪定道と名所をいささか誇張して表現している面が看取されるのである。

なお[表1]は、これら絵図中に記載された立山山中の地名・堂舎数を纏めたものである。

#### 2-4. 紀行文にみる立山山中の状況

近世立山の紀行文は、すでに諸本の翻刻文が紹介されている。<sup>29)</sup>ここではこれまでと同様に、延宝～元禄期の紀行文を、立山山中の状況の記述という視点で見ておく。

##### ①天和3年(1683)『日本行脚文集』<sup>30)</sup>

俳人・大淀三千風は、天和3年4月4日、仙台を出立して6月12日、越中路に入り、その滞在期間に立山禪定を行っている。本紀行文は、元禄3年に刊行され、そのなかに収められた「立山路行」から立山山中の地名を抽出することができる。

表1 絵図に記載された立山山中の名称(延宝～元禄期)

越中国四郡繪圖		立山ザラ越之圖		立山禪定並後立山黒部谷等繪圖	
延宝6年(1678)以降※		元禄11年(1698)頃※		元禄13年(1700)以降※	
名称	堂・祠	名称	堂・祠	名称	堂・祠
				藤橋	
		平岩			
勝妙川		正妙川		称名川	
大河内		湯ノ又川		常願寺川	
				せん住堂	1
材木坂		材木坂		材木坂	1
		熊野権現	1	熊野権現	1
たんか原					
				たんさい	1
				ぶな坂	
				かぶろ杉	1
くわ谷		桑谷		桑谷休所	1
不動堂	1	不動堂	1	不動堂	1
勝妙瀧		正妙ノタキ		正名瀧	
弥陀カ原					
追分					
		祖母岩		うば石	
姥カふところ				うばふところ	
一ノ谷				一ノ谷	1
小松坂		小松坂			
				鏡石	
下市場					
上市場					
室堂	3	室堂	1	室堂	2
玉殿岩屋				岩屋	
六道					
はらひ谷	2				
浄土山		浄土山		浄土山	1
一ノこし	1	一ノコシ	1	一ノ腰	1
二ノこし	1	二	1	二ノ腰	1
三ノこし	1	三	1	三ノ腰	1
四ノこし	1	四ノコシ	1	四ノ腰	1
五ノこし	1			五ノ腰	1
立山	1	立山御前	1	口山	1
御汝	1	御内陣	1	大汝	1
富士				ふじ折立	1
		真砂之山			
別山	1	別山	1	別山・池	1
大はしり					
小はしり					
				みとりケ池	
みくりカ池		池		みくりケ池	
				仁王堂	1
				からだせん	1
地獄		地獄谷			
				地藏堂	2
				ちノ池	
劔嶽		劔之山		劔嶽	
堂舎 計	14		10		24

※原図の成立年代については、本文に根拠を記している。

蘆倉庄(芦峠寺) → 四十間のいらち川(称名川) → 葛藤の絃橋(藤橋) → 材木坂の曲径 → 天津原(弥陀ヶ原) → 一谷の鎖 → 勝妙の瀧(遠望) → 獅子落とし(獅子ヶ鼻) → 護摩窟 → 室堂(泊) → 祓所 → 頂上御禅(雄山山頂) → 早坂 → 地獄 → 千蛇が池 → 劔御嶽(遠望) → 麓の旅舎(芦峠寺)

本紀行文において、天和期にはすでに材木坂、天津原、一ノ谷、勝妙瀧、獅子鼻、地獄谷などの見所・難所があり、それらを結ぶ禅定道の存在が浮上してくる。藤橋は、藤蔓で編んだ吊り橋であったことが窺え、その位置から千蛇が池は「みくりが池」、早坂は「大はしり」を指しているものと思われる。途中に休憩できる小屋はなく、宿泊地は室堂である。

なお、三千風は「峰入行者の笈措置すりの峙路にゆよしては法螺観文をずして煩惱の世夢を破り」、「修験三身の行躰まのあたりに見るもいみじきや」と綴り、山中で修験者と遭遇している。当該期の立山禅定は、こうした修験者や行者、僧侶が主流を占めていたことが窺える。

さらに興味深いのは、「山之名所縁起、五尋一軸書置。左之記、山中道記景眺也」とあり、三千風が出発地の芦峠寺において立山山中の名所縁起なるものを実見している点である。「五尋一軸」とあることから、比較的大きな絵画であったと推察される。そうした大絵画は、おそらく肉筆画であると想定され、すでに芦峠寺に存在していた蓋然性が大きい。天和期には立山禅定にあたって、あらかじめ景観・名所・縁起などの山中情報を芦峠寺で得ていたのではなかろうか。

②元禄9年(1696)『一宮巡詣記』<sup>31)</sup>

橋神道なる神道を唱道していたとされる橋三喜は、延宝3年(1675)～元禄10年(1697)にかけて全国の一の宮を巡拝しており、その記録が本紀行文である。越中へは元禄9年7月3日に入り、魚津で1泊

し、翌日立山禅定のために芦峯寺で宿泊、7月6日に立山御前に登拝している。本紀行文もそうであるように、元禄期までの出発地は、芦峯寺としているものが大半を占める。立山山中の地名を抽出すれば、次のようである。

足倉(芦峯寺) → ほったて山坂 → 常願寺川  
→ 金坂 → 大小材木坂 → ぶせう坂 → 志  
かりばり → かむろ坂 → 禿杉 → ぶな坂  
→ 小鮒坂 → 浄明が瀧(遠望) → 桑が谷 →  
不動堂(別称:中の室) → 弥陀が原 → 一の  
谷鉄くさり → 獅子がはな → 大岩平 → 上  
市場・下市場 → 室堂(泊) → 立山権現の御  
前(雄山山頂) → 地獄 → 姥が懐 → 朽木  
坂(材木坂) → 芦倉村(芦峯寺) → 岩倉(岩  
峯寺)

この往復ルートは元和3年に大淀三千風が禅定したルートと一致している。藤橋について「水深き時は、藤綱にて橋を渡し取付渡る」とみえることから、吊り橋は恒常的な設置ではなかったと思われる。しかりばり・禿杉が記載され、元禄期にはそうした地名が付され、流布していたことが判明するが、しかりばりについては「竜宮までぬけたりと云」、禿杉については「神の座し給ふ木と云」とあり、続く正徳期の言説とは異なっている。さすれば元禄期は山中名所言説の摸索期であったのかもしれない。

また三喜は、帰りの材木坂道の途中で馬に乗って帰村しており、これも禅定人に対する宗教村落によるきめ細かな対応の一環と察せられよう。

さらに「是は絶頂の社図、立山麓御姥の社、芦倉村にあり」とあり、芦峯寺に立山絶頂に至る「社図」があったことが記されている。ここで想像を逞しくすれば、この「社図」とは三千風が記述した「山之名所縁起」なる立山山中の絵図のことではなかろうか。元禄期までの禅定人は芦峯寺での宿泊が多くみ

られる。禅定人の宿泊目的のひとつには、芦峯寺の宿坊家が有していた、立山山中を描いた絵図による事前の情報収集があったことも想像されうる。

## 2-5. 小結

これまで近世前期における立山山中の状況について管見される史資料で検証してきた。資料的制約を内包しつつも、これまでの検証内容を纏めると以下のようなになる。

### ① 元和期(1615~1624)

この時期には、すでに立山山中には不動堂をはじめとする幾つかの立山権現社の末社が建立され、室堂が宿泊地として確立している。玉殿岩屋・材木坂・一ノ谷など幾つかの山中地名も成立している。

### ② 慶安期(1648~1652)

禅定道は未整備の状況が窺え、例えば藤橋のような吊り橋は無く、称名川では平岩からの徒渡であるが、材木坂から山中に点在する堂舎を連結させる道もしくはルートが確立している。

### ③ 延宝期(1673~1681)

山中の堂舎をめぐる禅定道に加えて、立山~別山までの廻峰、別山からの大はしり小はしり、地獄巡りなど、室堂周辺および山上の禅定道が確立している。(浄土山への登拝道は未確立か)

### ④ 天和~貞享期(1681~1688)

藤橋~材木坂~室堂(宿泊)、立山禅頂、地獄巡りという一連の禅定パターン(セット関係)が確立している。藤蔓で編んだ臨時的な吊り橋(藤橋)が掛けられ、禅定道の草刈りが行われるなど、禅定道の整備が進められる。

### ⑤ 元禄期(1688~1704)

山中において例えば、迦羅陀山、仁王堂、断罪坂などの堂舎が、それまで無かった場所に設置されるようになり、その数が増加している。また山中の見所が新たな言説とともに設定され始める。

## ⑥ 正徳期（1711～1716）

山中の見所・地名に対して由来や言説が付され、大杉や巨石を取り込んだ女人禁制譚も確立・流布されて、きわめて名所案内の様相を呈するようになる。宿泊地である室堂の他、途中の桑谷では昼食のための休憩所が整備され、販売を行う「茶屋」も設けられる。

元和期以前、立山山中に宗教的建造物が存在していたことは分明であり、その成立は中世にまで遡る蓋然性が大きいとみられる。室堂については元和3年（1617）に玉泉院（前加賀藩主前田利長夫人）により「再興」されていることが史料で確認でき、発掘調査により15世紀末頃には小規模の建造物（2×2間）が存在していたことが確認されている。<sup>32）</sup>

続いて延宝期には、室堂周辺と山上、地獄巡りなどの禅定道が確立し、そして天和～元禄期にかけて堂舎・禅定道の整備が急速に進められ、禅定パターン（セット関係）が定形化する。

さらに正徳期には、立山山中の整備がある程度達成されており、それまでの見所・地名に由来・言説などが付されて、名所的な性格を帯びるようになっていくのである。

かような山中での由来・言説の成立は、「略縁起」が立山山麓の宗教村落によって外圧を取り込みながら戦略的に生成されていく現象と無縁ではないと思われるが、「略縁起」との関連性については別個の議論が必要であり、本稿では立ち入らない。<sup>33）</sup> 本稿では、当該期の立山山中の変容を名所化の動きと捉えるならば、原淳一郎氏が指摘しているように「どういう側面では聖性を維持し、どういう側面で俗化したのかに着目し、それが近世社会といかに連動したものであるか」<sup>34）</sup> というところで個別的な議論を積み重ねる必要があることを指摘しておきたい。

それは個々の立山山中の名所がどのような背景のもとに生成されたのかを含む問題でもあり、名所の時期的変容とともに別稿で論じたい。

## 3. 立山名所の形成

### 3-1. 加賀藩による立山山中の整備

近世の立山は加賀藩の支配下にあり、岩峯寺衆徒（24坊家）が立山別当として、山中管理の任に当たった。加賀藩は重要な祈祷所として、あるいは軍事的拠点のひとつとして重視し、近世初期から立山山麓の岩峯寺・芦峯寺に対して庇護的な態度を示している。

立山山中の堂舎においては、峰本社と室堂が藩支弁による御普請所であった。修復の際は、立山別当が寺社奉行へ注進し、勝手方の詮議をへて作事奉行の直轄による普請が行われた。<sup>35）</sup> 近世における最初の峰本社の修復は寛永18年（1641）、室堂の再興は元和3年（1617）に行われており、それ以前にすでに峰本社と室堂は存在したとみられている。

こうした加賀藩の庇護は、立山山中の整備を活性化させたと考えられるが、他方でこれら以外の整備・修復は岩峯寺衆徒が自ら費用を工面して行うことを義務付けられたのである。そのため岩峯寺衆徒は、慶長17年（1612）に高岡で出開帳を実施したのをはじめとして、正徳2年（1712）には金沢で出開帳を実施していく。<sup>36）</sup> これらは立山山中の破損修理費の捻出が主目的であった。

### 3-2. 民間寄進による立山山中の整備

これまで見てきた延宝～元禄期における立山山中の変容について別史料から検証してゆきたい。山中の堂舎・禅定道の整備がそのまま単線的に名所化につながるのではなく、山中の見所に地名を取り込ん

だ由来などを絡めながら、複合的に名所化が達成されていくのではないかという見通しから、いま少し〈立山名所〉の原初の様相に迫りたいと思う。

まず取り上げるべき史料は、『奉納越之中州立山絶頂寶藏一軸』（卷子本）と『奉納一軸寫』（冊子本）である（以下、『立山寄付券記』と称する）。<sup>37）</sup>『立山寄付券記』は、すでに周知の通り、僧侶をはじめとしたあらゆる階層が岩峯寺へ寄進した内容の記録であり貞享期から幕末にまで及んでいる。本史料を初めて調査した木倉豊信氏は「当時の立山開発を知る大切な資料といえよう」、「山岳交通の史料としても顧みられてよい」と所見<sup>38）</sup>を述べているが、立山の「観光地」化という視点で捉えており、その炯眼には驚くばかりである。

さて本史料に依れば、貞享3年（1686）4月、金沢浄土宗寺院の浄安寺心誉頓岡、極楽寺覚誉利寛、妙慶寺向誉唱阿が願主となり立山室堂に大規模な寄進が行われている。序文は、加賀藩の曹洞宗寺院の触頭であった大乘寺の卍山道白によって記され、そこには寄進の目的が、「山径険而茅塞、山川急而無橋、古来欲登山者無不患之」であったため、「金沢道俗」が「捨財作券」となして、「山径茅草」を除き、「山川藤橋」をつくること、「於室堂鋪筵点燈」を絶えないようにすることが挙げられている。すなわち寄付行為によって立山禅定道と宿泊地を中心に禅定人の利便を図ろうとするものであり、立山における一大整備事業であったとみられる。

『立山寄付券記』は、諸先学が指摘しているように、貞享3年を基点に幕末に至るまで寄進内容が追記されている。追記年代が記載されている箇所もいくつか確認されるものの、それらをすべて年次的に抽出するのは困難を伴うことから、史料として扱いにくいことは事実である。さりながら、寄進内容を禅定道・堂舎などの建築物で整理することで、貞享3年以降の立山山中の実景観が浮かび上がってくる。そうした観点で寄進内容を整理したものが〔表2〕

である。

本史料に依れば、室堂、峯御本社は加賀藩による御普請所であったが、その他の堂舎は出開帳による費用捻出はもとより、多岐にわたる身分層の寄付金で設置・修復されていったことが分明である。そうした山中整備事業は、貞享3年以降に本格的に開始されたものとみられる。

寄進物の追記経過（寄進年次は不詳）をたどると貞享期以降、当初は室堂の燈明料をはじめとして、藤橋や道刈による禅定道のインフラ整備、堂舎の建設・修復といったハード整備が中心である。それが整備されると、次第に宝物や仏具・法器、食器や鍋類など生活具が寄進され、ソフト面が充実していく。さらには一ノ谷、地獄谷、山上などの喚鐘（設置か修復かは不詳）も加わり<sup>39）</sup>、立山山中の整備が段階的・計画的に進められていく過程が看取されるのである。こうした経過は、近世を通じて立山山中の維持管理が修繕も含めてどのように行われたのかという問題を含むものであるが、その解明は別稿に譲ることとしたい。

なかんずく特筆されることは、こうした寄進物のなかに、「老卷立山記」及び「立山絵図」が含まれている事実であろう。前者は「寶永丙戌孟夏」、「應岩峯常住坊之需、考當山古傳請名家曆覽書之」とあり、宝永3年（1706年）、加州石川林景任が岩峯寺の要請に応じて一山の由来を纏めて奉納したとある。また後者は金沢在住の木村與兵衛によって奉納されたもので、いまのところ具体的な構図・図像は不詳である。とはいえ、当該期に立山の由来記と絵図が加賀（金沢）との関連で整備されていることは、ひとまず確認しておきたい事実である。

表2 『立山寄付券記』にみる立山山中禅定道・堂舎等の整備

寄進内容	寄進者
藤橋	大津 清右衛門
藤橋	馬坂 伊左衛門
藤橋	青山逸角殿 後室
湯役藤橋料	加州 妙慶寺向譽唱阿和尚、波着寺権大僧都雄澄
足舄より湯ノ川迄道刈料	加州 妙慶寺唱阿和尚
温川ヤクシ堂	富山村木町 車屋治良右衛門
材木坂道刈	越中虎谷 重兵衛、魚津浜屋伊右衛門、同処高岡屋太郎兵衛
不動堂よりぶな坂迄道刈料	越州 青山逸角殿後室
ぶな坂より桑ヶ谷迄道刈料	加州 玉泉寺南通
熊野ノ宮	越中三日市 八郎右衛門、利兵衛
熊野ノ宮	大白石村 茂助
嶽崎堂	加州 木や四郎右衛門
不動堂〔建直〕	尾州知多郡渡内村 自得
不動堂上葺	勝田加兵衛
不動堂上葺	大坂 道可
中津原地藏堂	富山石倉町 岩崎屋仁右衛門
追分堂※	加州 木や伊右衛門
一ノ谷堂	天正寺村 重右衛門
一ノ谷堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
石燈籠式本※	大田屋六郎右衛門
室堂前石燈籠老本	富山 津田祐悦 三日市 寺嶋屋仁兵衛
石燈籠老対	天正寺村 金山重次郎
六道地藏堂〔再興〕	金沢野町 酒屋善左衛門
六道地藏堂〔再興〕	江戸 紺屋清右衛門
六道堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
祓殿堂	東本江村 善右衛門
祓殿堂	大坂屋重兵衛
祓堂	富山 興四右衛門
祓堂	岩崎観音講中
一ノ興堂	金沢野町 酒屋善左衛門
一ノ越堂	滑川 綿屋九郎兵衛
一ノ興堂	高岡 寶園寺和尚
一ノ興〔再興〕	加州金沢野町 善左衛門
二ノ興堂	大津 藤左衛門
二ノ越堂	射水郡東老田村 重左衛門
二ノ興堂	道金屋五郎右衛門
二ノ興堂	加州金沢野町 善左衛門
三ノ興堂	金沢西川堅町 池田屋長八(太)郎
四ノ興堂〔再興〕	加州金沢野町 善左衛門
九品ノ堂〔再興〕	金沢野町 酒屋善左衛門
九品ノ堂	加州金沢 天徳院和尚
九品ノ堂	金沢 五郎右衛門
九品堂	玉林坊良覚
五腰綱堂下前立不動堂	金沢 紙屋嘉兵衛
法納堂※	金沢野町 酒屋善左衛門
法納堂※	松岡九兵衛
法納堂※〔再興〕	加州金沢野町 善左衛門
水上堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
水上堂	明星坊
浄土山ノ水上堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
浄土山前堂	富山 吉野や彌三右衛門
浄土山峯堂	才田や三右衛門
別山堂	南泉坊
地獄谷地藏堂	金沢 性海院定墨貞心
地獄追分堂	富山海老町 桶屋彌治兵衛
地獄谷中尾堂※〔建直〕	大坂戦場金田町 金兵衛
加羅多山堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
谷地藏堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
谷ノ地藏堂	京升屋源仁
池地藏堂	加州金沢 墨屋源五、鍛冶仁右衛門、米屋重兵衛、河原町宗右衛門、北村小左衛門
地藏堂	越前 岩田庄左衛門
再会ノ川原堂	金沢 市兵衛
血ノ池堂	氷見町 仁兵衛

『立山寄付券記』(雄山神社前立社壇蔵)より立山山中の建造物のみを摘出して

いる。  
※寄進場所が不明であるが、前後関係・他記述より場所を推定。

### 3-3. 「立山名所記」の成立

こうして寄進による立山山中の整備が進むなかで、次に注目されるべき史料として、「立山道名所付」<sup>40)</sup>と内題にある内寸17.9×135.9cmの卷子本を取り上げる。

本史料は木倉豊信氏によって見出され、すでに廣瀬誠氏により翻刻文も紹介されているもの<sup>41)</sup>であるが、ひとまず再翻刻しておく。

#### 〔史料⑥〕

#### 立山道名所付

##### 一、一夜泊り

塚三つ有、地藏有、是ハ死人之一夜泊りて行く所

##### 一、岩倉

昔ハ七堂之所、坊数貳拾四坊有 此向、鷹とまりと云所有

##### 一里

##### 一、横井村

##### 一里

##### 一、ちかき村

##### 一、芦峯寺 領分之内

四手ノ山内ニ地藏堂有、立山ノ本地大宮有、若宮有、是も昔ハ廿坊之所也

##### 一、姥堂 前ニ忍んま堂有

むめう橋、たひしやく堂、うはノ本尊ハこんこうかひ、たひ蔵うかひ、中王は大日如来、即是ハ天方あまくたり給ふ、其所よふかふ石有、橋ノ左右ニ四本杉有、大キサ八かひ九かひ十かひ十二かひ

##### 一、湯ノ又有、平岩ト言有

此河照名川と言、爰ニてこりお取所也

上りて、

##### 一、こかね坂 上り古堂と言所有、此ところ千坊ケ原也

上りて、

一、材木坂 横積たてすみ かきかのど  
坂之内、

一、わしの岩屋 ちゑくわう佛  
同

一、熊野権現堂有  
上りて、

一、ひ女ノ坂 ひちよ杉  
上りて、

一、しかりはり  
上りて、

一、りうさひノミ坂  
坂之内、

一、かふる杉  
上りて、

一、段ケたいら  
上りて、

一、ふなさか  
上りて、

一、ふなケたいら  
一、八瀬尾

少行てふしおかミと言所有、爰ニて照名ケ瀧おお  
かむ

一、地ハラ権現堂有  
上りて、

一、くハケ谷 是ニ而中飯ヲ遺所也  
上りて、

一、不動堂有  
一、弥陀ケ原野

但し内ニセうらいノつくる田有、内ニちくせう  
原有

一、一ノ谷 追分地蔵堂有

一、一ノくさり 長サ弐間斗

一、二ノくさり 長サ十弐間斗

是三条宗近打上ル、是方上りて上ニ弐間四方斗  
ノ岩穴有、爰ニて弘法大師七夜ごまたかせ給ふ  
所也、是方上りて鹿ケはな、是ハ光蔵坊と言く

ひんノ住所也、則こんがうつゑを作る所也、又  
扇子ケたけと言処有、是ニ扇子おをさむる

上りて、

一、小松坂

一、鏡石有

是方上りて下市場上市場、是ハせうらいノ市をたつ  
る所也

一、地獄追分ノ地蔵有

一、室堂有 是ニ一夜泊りて御前へかゝる  
上りて、

一、六道有

一、さんけ坂

上りて、

はらひ堂 手水遺所

上りて、

一、一ノ越、二三四ノ越

上りて、

一、九本ノ浄土有

一、六尺斗ノ小くさり有

一、五ノ越則御宝前南向也、東ハ不動、西ハ弥陀、  
中ニ御宝蔵 但し和銅銭、駒引銭、人ノ角弐つ、  
馬ノ角弐つ、鬼ノきば老つ、佐伯有若左衛門と  
のくまおい[ ]さはノ流矢一本、鳥したノ矢  
老つ、小判十両斗有

御前方、

一、南ニ浄土山

一、同南ニ當りて龍王ケたけ

一、御前方北ニ當りて別山有

此間一里さしおろし、さひノ川原其外いろいろ  
ノ事有

一、別山方又北ニ當りて劔ケ御前

但シ此道ニ行者返しと言処也

御前方返りて、

一、たまとのゝ岩屋 本尊弥陀

并ニたひないくゝり、内ニ瀧有

地獄禪定



- 一、みたらし池      みとるノ池
- 一、はりやノ地こく      戸たて地こく
- 一、ちノ池前ニ堂有      さかや地こく
- 一、こんや地こく      かじや地こく
- 一、いもし地こく      玉ノ地こく

右之分ハあらましノ分、惣而一百三十六地こく之内  
いろいろノ所有

- 一、からたせん地蔵      みねニ有
- 一、谷ノ地蔵ニ躰

是ハさひ人ノためニ昼夜六度地獄江入、くるし  
ミおうけ給ふ、さるに右手足なくもく人にて  
おハします

- 一、姥ケふところ谷

うばケ石有、則うつふしノ也

此末、最前上りし道也

右、御山開帳ハ大宝元年かのとうし四月十四日ニ  
四条武子佐伯有若左エ門此山開帳被成、別山ニシテ  
よろひお治め、ゆミをおりて芦嶮江立帰りて出家シ  
テ御名地かう上人と付給ふ、堂を立、年月おいたり  
八十才ノ御年、定ニ入給ふ

本史料は、近世後期の名所図会に見られるような  
文芸性・物語性は薄弱であり、立山名所のみを記載  
していることから、名所に関する知識の解放と啓蒙  
性を強く持っており「立山名所記」の性格が付与さ  
れるべきものであろう。

山頂（九品上部）には「六尺斗ノ小さり有」と  
あり、山頂付近に六尺斗（約1.8m）の鎖場があった  
ことを記載しており、興味深い史料である。

本史料には年号が付されておらず、木倉氏は成立  
年代を正徳・享保頃（1711～36年）と推測している。  
これまでの諸事実を踏まえて、本史料の記載内容か  
ら成立年代を再検討してみよう。

まず「御前右廻りて」、「地獄禅定」とあり、廻峰  
ルート及び地獄巡りの存在が看取され、延宝期以降  
の状況を示す。さらに「からだせん地蔵式躰」に加

え、山中途中の弥陀ヶ原の「地藏権現堂」、一ノ谷手  
前の「追分地藏堂」といった堂舎がみられ、元禄期  
以降の状況を示す。金坂は「こかね坂」と記載され、  
小金坂という表記は正徳期が初見の地名であった。  
桑谷は「是ニ而中飯ヲ遺所也」とあり、昼食の休憩  
所となっているが、茶屋の存在は確認できない。「鹿  
ケはな（獅子ケ鼻）」には伝承が付され、「弥陀ヶ原」、  
「下市場上市場」、「谷ノ地藏」の言説なども、正徳  
期に始まる名所案内的な様相が濃厚である。

それでは、正徳3年（1713）に成立した『和漢三  
才図会』（寺島良安著、全105巻、正徳2年自序成立）  
巻六十八「立山権現」記事と比較してみるとどうで  
あろうか。『和漢三才図会』では、湯川に「行人取垢  
離處」、一ノ谷の鎖に「三條小鍛冶宗近所作」、獅子  
ケ鼻に「天狗自號光蔵坊按」、「弘法大師護摩壇跡」  
などとあり、本史料と記載内容が近似している。さ  
らに注目すべきは、両史料に記載される本社（御宝  
蔵）の什物であり、該当部分を列挙してみると次の  
ようである。

#### 『立山道名所』

五ノ越則御宝前南向也、東ハ不動、西ハ弥陀、中ニ  
御宝蔵 但し和銅錢、駒引錢、人ノ角貳つ、馬ノ角  
貳つ、鬼ノきば耆つ、佐伯有若左衛門とのくまおい  
[ ]さはノ流矢一本、鳥したノ矢耆つ、小判十両  
斗有

#### 『和漢三才図会』

本社 六尺三尺、一又南向、白砂庭 六尺九尺  
右ノ方ニ有リ奉納堂、本尊阿彌弥如来 垂跡伊弉諾  
尊、不動明王垂跡手力雄命  
什物 有頼所持ノ刀無銘、臺股鏃 有頼射熊之矢根  
錫杖 行基菩薩奉納之、鬼牙一ツ 北山石蔵之口ノ  
牙、角二ツ 若狭老尼之額ノ角、駒ノ角 藤義丞化  
シ馬ニ生ル角、天狗ノ爪一ツ 光蔵坊之手爪、天錢

### 三文 外ニ異國之古錢數多アリ

立山山頂に宝蔵された什物は、『和漢三才図会』の記載のほうの種類・数とも多くなっており、加えて什物の由来を立山山中の名所と結びつけている点が本史料と異なっている。それ故、本史料は未だ什物の由来が整備されていない状況を示していると認識され、本史料は『和漢三才図会』に先行する元禄末～正徳3年以前、もしくはそれに併行した時期に成立したものと推断される。すなわち立山山中の名所化が進行していく状況、名所の由来・言説の模索期を示したものであろう。こうした「名所記」が立山山麓もしくは周辺地域で成立し、やがて情報が伝達していくなかで、上方（大坂）で編集された『和漢三才図会』に収載されたものと想定されるのである。

さらに『和漢三才図会』に記載された立山山中の名所数は、それまでの数を遙かに凌駕している。そして『和漢三才図会』に示された名所は、その後の

ベースとなり、ほとんどが近世後期にまで引き継がれ、追加されていくのである。

かくして〈立山名所〉とは、貞享期の山中整備事業に端を発して、元禄・宝永期を通して山中の地名と由来・言説が「名所記」に纏められ、そうした経緯をうけて創出された新たな宗教的世界のことである。そして〈立山名所〉の原形は、おそらく正徳期に形作られたのではないかという結論に至るのである。かような正徳期に生成・再編された新たな宗教的世界が、唱導と流布により民衆の生活レベルへ浸透・定着するには、まだしばらくの時間の経過を要したであろうが、少なくとも〈立山名所〉が生成された正徳期には全国各地から来訪する禅定人のニーズに応えるべく岩峯寺・芦峯寺による受入態勢がある程度整備され、〈立山名所〉の情報を発信できるようになっていたであろうことはかなりの確度をもっていえるのである。

## 4. 木版山絵図による立山名所の流布

### 4-1. 木版立山絵図の構図

前節まで史料から、貞享～正徳期（17世紀末）に山中の整備が行われ、正徳期（18世紀初）には〈立山名所〉の原形が形成されたと結論づけた。

当然のことながら、名所形成とは、立山山中の魅力を発信し、さらなる禅定人の招聘を主目的としているのであり、そうした背景のひとつには先述した通り、名所形成以前（延宝～天和期）における禅定人の階層拡大が想定されるのである。

さらに正徳期における立山の名所化には、加賀藩の宗教政策・立山支配政策というよりは、むしろ立山禅定の拠点村落である岩峯寺・芦峯寺の戦略性が底流しているのではないかと思われる。その問題については別稿に譲ることとして、本節では「木版立山絵図」（以下、山絵図と称する）を分析材料として取

り上げてみたい。

山絵図とは、立山禅定に誘うために作成された木版の立山絵図のことである。岩峯寺と芦峯寺の宿坊家によって廉価で頒布されたものが大半を占め、名所案内図の性格を保持したまま、昭和初期まで再販が重ねられている。近世のものは概ね60×40cmであり、和紙2枚を中央で貼り合わせた継紙である。

いうまでもなく、こうした刷り物の特性は肉筆のものとは異なり大量に頒布・流布することができる利点にあり、山絵図は立山禅定を目指す人々へ山中等の情報を伝達することはもとより、その表題が示すように〈立山名所〉の宣伝広告に利用されたことは容易に想像できよう。

すでに諸本が紹介され<sup>42)</sup>、詳細な図像分析による異同や前後関係に関する考察もいくつか備わってい

る。いまのところ年代が確認できる最古の図版は、「享保七年江戸堺町立山吉日、施主中屋半七郎」とあるのがそれである。[図3]この山絵図は、芦峯寺に関する図柄であるとみられ、享保期には、山絵図が成立していたことは間違いない。

近世において岩峯寺で作成されたとみられるものは表題に「越中國立山禪定名所附圖別當岩峯寺」とあり、略縁起が文字注記されている。[図4]他方、芦峯寺のものは表題に「越中國立山禪定并略御縁起名所附圖」とあり、略縁起がないため容易に区別することができる。このことは、岩峯寺と芦峯寺の衆徒で、それぞれ意図的に編集された山絵図を頒布していたことを示している。

かかる表題の相違点について福江充氏<sup>43)</sup>は、芦峯寺は加賀藩から山中管理を認められておらず、それゆえ芦峯寺の山絵図は「立山禪定道」上の名所と「立山略縁起」の舞台となる名所を合わせ描いた図」で

あるとし、あくまで山麓の宗教施設の紹介が主目的であり、享保期以前に芦峯寺ではそのための「略縁起」の原本<sup>44)</sup>が存在したことを想定している。

他方、岩峯寺のものは、岩峯寺が加賀藩から立山山中諸堂舎の管理権や山入銭・参銭等の徴収権を付与されたことを背景に、山絵図に山中名所とそれに関わる立山略縁起の紹介が主目的であるとし、それゆえ山絵図の積極的頒布を主導したのは岩峯寺側であることを想定している。かかる福江氏の指摘は、山絵図作成の背景を理解するにおいて看過しえないものである。

しかるに他方で、岩峯寺と芦峯寺の山絵図は、表題・略縁起の有無という異同があるにせよ、構図を見るとほぼ一致している。すなわち、画面上下が東西、左右が南北となっており、立山が中央に配される。北は劔岳、南は浄土山・刈込池周辺の範囲である。禅定道は、左下の岩峯寺を起点に芦峯寺を中継

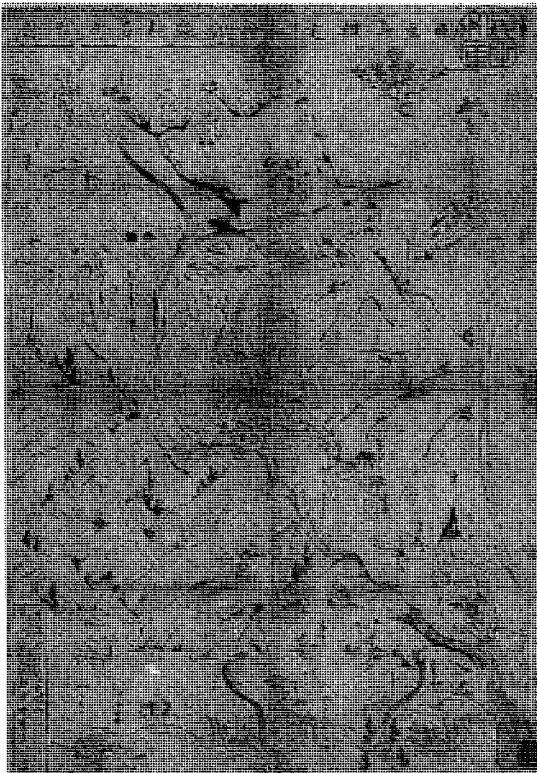


図3 越中國立山禪定并略御縁起名所附圖  
(富山県立図書館「中島文庫」蔵)

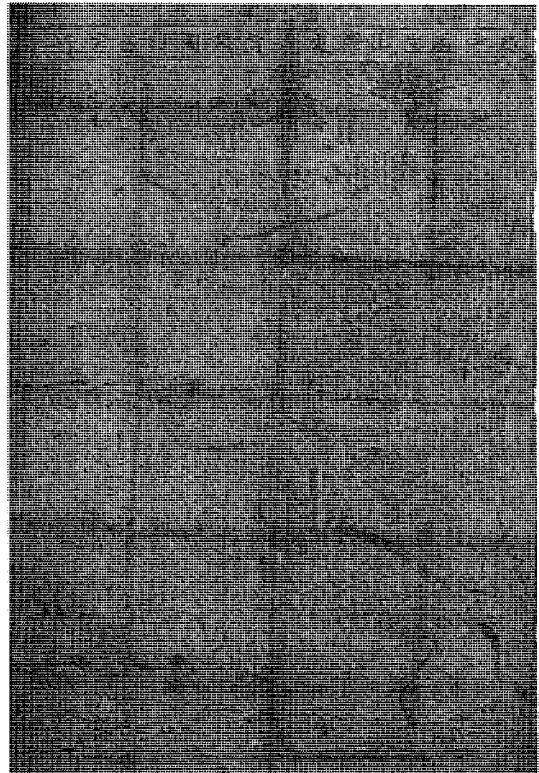


図4 越中國立山禪定名所附圖別當岩峯寺  
(富山県立図書館「中島文庫」蔵)

点として右下の藤橋へ、さらには斜め中央に横断して中央上部の室堂・玉殿岩屋へ通じ、そこからさらに上部の立山へ繋がる、といった具合である。福江氏が指摘したように、表題とそこに示される主目的の相違については加賀藩の宗教政策・立山支配政策の反映を読み取ることはできるが、構図が一致していることは、そうした背景だけでは理解できないのはなかろうか。

岩峯寺と芦峯寺の両衆徒が作成に関わった山絵図の構図が一致していることは、それぞれの主目的は異なるものの、立山禅定道の整備において相互の共通意識が働いていることをそこに想定するべきであろう。仮に、両衆徒が採用した山絵図の元絵があったとすれば、それが同じ元絵であったことを示しており、〈立山名所〉をめぐる宣伝活動において両衆徒が連携していたことを示しているとも捉えられるのである。

#### 4-2. 金沢書肆と山絵図

ところで立山の名所案内的な性格を有する山絵図作成の考察をすすめるうえで、そもそも版本は何処で、誰が制作したのかという問題が横たわっている。そこで次の史料をひとつの手掛かりとして推論してみたい。

[史料⑦]

『六用集』<sup>45)</sup>

(前略) 出板之分

伊勢京大和廻り高野和歌浦

須磨明石播州名所道圖

北陸道江戸道中圖

金沢ヨリ中仙道東海道圖

茶之湯奥儀鈔

居家要言掛物

紅葉賀御手本

当用御手本

筆の海手本 女手本

硯の海 同

袖中曆

年代一覽

安見年代記

前後赤壁賦 文徴期細字石摺

煙草記 たはこ入

立山禅定之圖

百寿圖

百福圖

連歌雨夜記

岩桂詩集

三用集

六用集

連歌式目和歌抄

玉津嶋和歌物語

正徳五年

金沢上堤町

三ヶ屋五郎兵衛板

本史料にみえる三ヶ屋五郎兵衛は、金沢書肆の草分け的な存在として知られる人物である。三ヶ屋は金沢の家柄町人であり、五郎兵衛は五代目にあたり「書車堂」を号とした。

今のところ確認できる金沢書肆(書林)による最古の出版物は、天和元年(1681)麩屋五郎兵衛板による俳諧書『加賀染』とされ、続いて三ヶ屋の出版活動が確認できる。三ヶ屋五郎兵衛は金沢上堤町在住の書肆であり、元禄元年(1688)には俳書を京都書肆との共同で出版している。ちなみに富山書肆で記録として確認できるのは、寛政8年(1796)紅屋伝兵衛である。ただし、天和2年(1682)の富山藩高札から、その時期には既に富山書肆の存在が想定されてはいるものの<sup>46)</sup>、金沢書肆と富山書肆の関係はいまだ不詳である。

さて『六用集』は「新曆要覽」「金沢寺院名寄」「金

沢ヨリ諸方道程」「年中行事」「加州湯本之図」「金沢名方薬有所」からなる便利帳で、正徳5年(1715)に金沢で出版された。その帳末には出版の理由とともに三ヶ屋五郎兵衛の板行目録があり、そこに「立山禪定之圖」とある。これまで本史料の存在は知られていたが<sup>47)</sup>、これを木版山絵図と結びつける視点はなかったと思われる。

先述した通り、年代が付された最古の山絵図は江戸在住の施主によって享保7年(1722)に作成されたものであり、続いて宝暦13年(1763)に尾張国在住の施主によって作成されたものがある。これらはいずれも芦峯寺の系統に属するものである。

貞享3年(1686)『立山寄付券記』の発足において、金沢の木村與兵衛が「立山絵図」を奉納(奉納年は不明)している。かかる「立山絵図」が肉筆(手書き)のものなのか、摺りものなのか、いかなる構図のものであるのかは不明であるとはいえ、こうした絵図の存在から研究者間では、山絵図の成立は享保7年よりもさらに遡る可能性が指摘されてきたのである。

本史料の「立山禪定之圖」がどのような構図のものなのかは不詳であるが、木版であることは間違いない。したがって山絵図の成立は、おそらく『六用集』が出版された正徳5年(1715)以前まで遡ることができる。今後は版木の有無も含めて調査を継続していく必要がある。

#### 4-3. 近世初期における名所記と地方出版

慶長(1596~1615)~天和期(1681~84)までは仮名草子が盛行した。特に京都、大坂、江戸で読み物としての名所記・案内記の出版があり、名所の由来や寺社の縁起に関心がもたれるようになる。また寛文期後半(1670年)には、すでに一枚刷りや継紙による名所記が出現したことが確認されている。それらは宝物の由来を語ることで、多くの寺社参詣者を集めようとしたことが指摘されており、<sup>48)</sup>一枚刷

りや継紙による「略縁起」に先行するものである。先に見た『和漢三才図会』巻六十八「立山権現」の本社什物記事は、そうした傾向と見事に合致している。宝物の由来を付すことは、近世初期における名所化の特徴のひとつであると捉えてよい。

三都に次いで、飛鳥寺の読み縁起(一紙巻紙)は元禄11年(1698)に成立しており、奈良でも17世紀後半には名所記が刊行されている。

他方で近世の地方出版は、先行研究により①寛永元年(1624)~延宝8年(1680)、②天和元年(1681)~享保20年(1735)、③元文元年(1736)~天明8年(1788)、④寛政元年(1789)~天保14年(1843)、⑤弘化元年(1844)~慶応4年(1868)という5期の区分が提示されている。<sup>49)</sup>

この区分に従えば、金沢書肆の出現は、第2期に当たり、名古屋・仙台・和歌山などの城下町と比較しても遅い時期ではなく、地方出版の先進地域として位置づけることができる。ただ、金沢書肆は近世を通じて53軒、出版物は114点にとどまり、京都書肆への依存傾向が指摘されており、金沢書肆の木版技術も、おそらく京都の影響下で成立したのではないかと推測されている。<sup>50)</sup>

#### 4-4. 山絵図による立山名所の宣伝

さて、金沢書肆との関連が想定されるのは、岩嶽寺である。管見の史料によれば、岩嶽寺衆徒は正徳5年以前、すなわち正徳2年(1712)、金沢で初めて出開帳を行っている。<sup>51)</sup>

そもそも開帳とは、神仏と民衆との結縁を意図したものであったが、次第に寺社の資金作りを目的としたものに変容し、全国的に開帳が盛行する元禄期には早くも収益を目的とする開帳になったとされる。

正徳2年における岩嶽寺の金沢出開帳は、「立山社堂六拾六社在之内、本社之儀者御建立、其外者先規方破損修理等衆徒方仕来候、然共自力ニ而難叶」とあるように、立山末社の修理費の捻出であり、金

沢町の民衆と立山権現との結縁を目的とする以上に、開帳寺院を宿寺として仏像・宝物を拝観させて開帳収入を得ることを大きな目的としていたとみられる。

ところで、岩峯寺が金沢へ進出する契機は、未だ判然としない。貞享3年(1686)には『立山寄付券記』にみられる浄土宗寺院を中心とした金沢の寺院間連帯による、立山山中への大規模な寄進行為があることから、それ以前に遡るものと考えられよう。仮に金沢との関わりを深めていた岩峯寺衆徒が、加賀藩で木版技術をいち早く修得した金沢上堤町の三ヶ屋に「立山禅定之圖」の版木制作を要請し、木版による山絵図を各地で頒布することで、立山禅定のさらなる勧誘を戦略的に進めていたとすれば、正徳期に形成された〈立山名所〉の宣伝が主目的であったことが想定されうる。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』が正徳年間に大坂で発行されたことも、そうした名所宣伝の戦略に拍車をかける好材料であったことであろう。

#### 4-5. 小結

本節の小結として、山絵図の成立について名所の成立事情とあわせて、以下のような仮説を提示しておきたい。

岩峯寺が加賀藩の経済的援助(室堂・峰本社の修

復)と民間寄進による山中道・堂舎の整備を進め、特異な自然景観を取り込んだ地名に由来・言説が付されて立山山中の「名所化」が成されていく。そうした動きと軌を一にして岩峯寺と芦峯寺は、立山禅定道の起点を岩峯寺、中継地を芦峯寺と位置づけ直し、禅定道と三山巡りや地獄谷巡りのセット関係を再編成して立山禅定人のさらなる増加を意図したのではなかろうか。

さらに〈立山名所〉の宣伝を目的に山絵図の作成を協同で行うこととなった。山絵図の元絵は、おそらく芦峯寺がすでに有していた「山之名所縁起」「絶頂の社図」のような地図的性格をもつ絵図、もしくは貞享期以降に岩峯寺へ奉納された「立山絵図」であったと思われる。それらの絵図は同じ構図であったことは考えにくく、どちらかの構図を両衆徒がともに山絵図の元絵として取り込んだ。しかるに版木の制作は、岩峯寺が金沢書肆、芦峯寺が江戸書肆や尾張書肆に要請することとなり、それぞれの宗教的景観を強調する図像が取り込まれた。かかる版木の制作費用は民間寄進行為に依存したのである。

そしてこうした〈立山名所〉を山絵図で広範囲に売り出そうとする立山衆徒の戦略的な動きは、三都・奈良に次いで、全国地方における名所宣布のなかでも早い時期の動きとなる。<sup>52)</sup>

### むすびにかえて—研究の展望と視座—

これまで立山禅定道をめぐる議論は、現存状況から近世禅定道の復原が困難を伴うこともあり、例えば『立山雄山神社暨末社書上帳』<sup>53)</sup>や『立山諸末社配置図』<sup>54)</sup>などの史資料を手掛かりとして、現地での堂舎痕跡を追究するなど、あくまで復元的視点が主流であった。<sup>55)</sup>近年、そうした調査成果は頗る進展してきているが、他方で立山禅定道や名所の形成は、禅定人が爆発的に増加することが確認される文化・文政期以降、すなわち近世後期に整備されたと

いう漠然とした理解にとどまっていたように思われる。

そこで本稿では、管見される史資料で〈立山名所〉の形成時期を再検証した。そのなかで立山禅定道と堂舎の整備と併行して由来・言説を付した〈立山名所〉が創出され、それらを宣伝広告する動きが近世中期まで遡ることを検証し、そうした動きの面期が18世紀初頭の正徳期にあると結論づけた。

とはいえ、現段階では試論の域を出ておらず、新

出史料が乏しいことは否めず、さらなる史料精査を重ねて細部の検証を期すものである。ただし本稿では、これまで諸先学により提示されてきた史資料を、立山の「名所化」という問題意識のなかで位置づけなおすことができたことに意義を見出せるように思われる。

ところで筆者は、こうした近世における〈立山名所〉形成の動きを、いずれは立山をめぐる「観光地」化の問題へと置きかえることを目指している。観光地・立山を、地域社会論的立場で捉えようとする研究はようやく途に着いた段階にあり、そこで今後の研究課題を列挙して本稿の結語にかえたい。

まず大きな議論となるのは、近世～近現代における観光地・立山の形成にかかる段階的把握であろう。近世における立山の名所化を基点として、立山の「観光地」化では山麓の宗教村落である岩峯寺・芦峯寺とともに山中が主な対象となっていく。そうした近世の立山の「観光地」化が、近現代にいかなる部分で引き継がれ、いかなる部分で衰退していくのか、丁寧な議論を積み重ねる必要がある。

近世においても検討すべき課題は多い。なかんずく〈立山名所〉の起源という問題の解明には、中世にまでその淵源を求めざるを得ない。これには考古学・宗教学的的手法による一層の調査・研究が待たれる。<sup>56)</sup> また立山の名所化については、今のところ正

徳期と文政期の2つのピークが想定されうる。そこには加賀藩の立山支配政策と岩峯寺・芦峯寺における争論の問題、立山禅定人および山麓参詣者の民衆化と女人禁制の問題も必然的に関わってくる。とくに両宗教村落の争論は、近世における立山の「観光地」化の動きとも連動していると考えられる。他方で、観光地再生産の維持のためには禅定人等の要望に対して柔軟な対応を迫られたはずであり、岩峯寺と芦峯寺がどのような部分で協力関係を有していたのかも見逃せない。

その他にも個別的な問題として、〈立山名所〉の時期的変容、〈立山名所〉と縁起生成、出版物による〈立山名所〉の流布過程<sup>57)</sup>といった、名所をめぐる諸問題、あるいは立山山中の維持管理、立山山中での禅定人の安全管理、禅定人の宿泊体制、宗教村落の利益配分の取り決め<sup>58)</sup>、立山山中での唱導(先達と中語)といった、観光地維持のための諸問題も浮上してくる。かかる諸問題を検証するためには、これまで諸先学が進めてきた宗教村落である岩峯寺・芦峯寺の個別研究はもとより、観光地・立山を総合的に捉え、そうした視座による研究蓄積が不可欠ではなかろうか。

こうした研究課題を念頭に置きながら、立山に関する史資料の調査・研究を進めていきたい。

## 註

- 1) 新城常三『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、1982年)
- 2) 青柳周一『富嶽旅百景—観光地域史の試み』(角川書店、2002年)
- 3) 福江充『立山信仰と立山曼荼羅』第三章(岩田書院、1998年)
- 4) 加藤基樹「越中立山温泉と略縁起—温泉の整備・経営と女人禁制をめぐって—」(『遊楽と信仰の

- 文化学』所収、森話社、2010年)
- 5) 近年、加賀藩の支配と岩峯寺に関する論考として、野口安嗣氏の一連の論考がある。『富山県[立山博物館]研究紀要』第10～12号、第17～20号を参照されたい。
- 6) 福江充「江戸時代の立山参詣者」(『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勧進活動—日本宗教民族学叢書4』所収、岩田書院、1998

- 年)
- 7) 加藤基樹「『三禅定』とはなにか—研究のあゆみと課題の発見—」(『立山・富士山・白山みつの山めぐり—霊山巡礼の旅「三禅定」—』所収、富山県[立山博物館]、2010年)
- 8) 富士山・白山・立山の三霊山を巡礼する習俗を「三禅定」と称する。研究史としては、小林一策に

- よって課題が提唱され、高瀬、福江、津田、村中、菊池各氏による論考・史料紹介があり、近年では加藤基樹氏が、その成立時期の再検討を試みている。加藤基樹「三禪定」考一成立と『三の山巡』にみる実態（『富山県[立山博物館]研究紀要』第17号所収、富山県[立山博物館]、2010年）
- 9) 大淀三千風「立山路行」（『日本行脚文集』所収、国立国会図書館蔵）、『橋三喜一宮巡詣記抜粋下全』（国立公文書館「内閣文庫」蔵）
- 10) 米原寛「藩政初期における加賀藩の黒部奥山認識」（『絵図に見る加賀藩と黒部奥山』所収、富山県[立山博物館]、2002年）
- 11) 吉井亮一氏は同絵図解説（『絵図に見る加賀藩と黒部奥山』所収）のなかで、津田宇右衛門編「加越能絵図調様品々帳」等の諸書上を根拠として、本絵図の作成時期を延宝6年（1678）4月以降であると推定しており、本稿では吉井論考に依っている。なお本稿の奥山絵図にかかる知見は同図録に依るところが大きい。
- 12) 高瀬重雄『立山信仰の歴史と文化』p 39～40（名著出版、1981年）
- 13) 雄山神社前立社壇文書には元禄末頃とされる老僧格兩人の出頭状が残されており、由来縁起等の持参を命じられているが、書上の控は見当たらない。『温故収録』巻10所収の書上がそれに相当するとみている。
- 14) 雄山神社前立社壇文書「立山道刈料請取状」（『越中立山古文書』p 224、立山開発鉄道株式会社、1962年）
- 15) 美女杉の存在は、寛政10年（1798）佐藤季昌『立山紀行』で確認できるが、文政6年（1823）尾張藩士某『三つの山巡』では「今ハ枯しよし」とあり、この間に枯木となったと推測される。『三つの山巡』については、加藤基樹「「三禪定」考一成立と『三つの山巡』にみる実態」（『富山県[立山博物館]研究紀要』第17号所収、富山県[立山博物館]、2010年）に詳しい。
- 16) 中島正文『北アルプスの史的研究』（桂書房、1986年）
- 17) 「享保二十曆 越中越後信濃飛騨境目山、且又御領国御山并谷川名目山名山成り川成絵図、先年御尋一卷書上申覚書帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 167～170）
- 18) 「天和貳年ニ廻り、同三年ニ廻り、貞享三年ニ廻り、奥山へ罷越し申覚書之帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 294～298）
- 19) 「元禄五年 奥山為御用六月廿四日在所罷立、立山一ノ越ヲこえ候而御前谷下り見分、其方針ノ木峠迄罷越諸事覚書帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 298～300）
- 20) 「元禄十年 奥山廻書上之写并同十一年方十四年迄絵図御用之写、且又同十四年越後市振村・越中境村御領国境等双方證文上申写」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 206～221）
- 21) 「宝永七年 境村源六同々仕り候而、上山さら越奥山廻仕人足并泊所付之覚帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 301～303）
- 22) 「正徳貳年 西水橋勘左衛門同道ニ而、上山さら越奥山廻仕人足并泊所付之立帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 303～307）
- 23) 一ノ越～五ノ越については、周知の通り、鎌倉時代初期に増補された『伊呂波字類抄』十巻本にみえ、中世前期にはすでに成立していた地名であり、本稿ではその事実を前提としている。
- 24) 「享保二十曆 越中越後信濃飛騨境目山、且又御領国御山并谷川名目山名山成り川成絵図、先年御尋一卷書上申覚書帳」（奥田淳爾編『黒部奥山廻記録』越中史料集成12 p 189～191）
- 25) 「越中國四郡繪圖（通称：延宝の国絵図）」（457×524cm、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）
- 26) 「立山ザラ越之圖」（123×89cm、個人蔵、富山県[立山博物館]寄託）
- 27) 「立山禪定並後立山黒部谷等繪圖」（99×94cm、富山県立図書館「中島文庫」蔵）
- 28) 米原寛「立山ザラ越之圖」の性格及び作製の背景について」（『絵図に見る加賀藩と黒部奥山』所収、富山県[立山博物館]、2002年）
- 29) 代表的なものに、橋本龍也編『越中紀行文集 越中資料集成10』がある。本稿の『日本行脚文集』所収「立山路行」、『一宮巡詣記』は同書所収の翻刻文を援用した。また、近世立山山中の地名を時系列で追ったものに、野口安嗣「江戸時代の立山参詣の費用」（『富山県[立山博物館]研究紀要』第19号所収、富山県[立山博物館]、2012年）がある。
- 30) 大淀三千風「立山路行」（『日本行脚文集』所収、国立国会図書館蔵）
- 31) 『橋三喜一宮巡詣記抜粋下全』（国立公文書館「内閣文庫」蔵）
- 32) 『芦峯寺室堂遺跡一立山信仰の考古学的研究一立山町文化財調査報告第18冊』（立山町教育委員会、1994年）
- 33) 立山における「略縁起」と山中の唱導・流布の関係性については別途議論が必要である。近世略縁起を戦略的性格から論じたものに、加藤基樹「近世寺社縁起の戦略性一三河国鳳来寺縁起を事例



- として」（『寺社縁起の文化学』所収、森話社、2005年）があり、裨益されるところは多大である。
- 34) 原淳一郎『近世寺社参詣の研究』序章第一節（4）（思文閣出版、2007）
- 35) 安田良栄「藩政期における立山峰本社の再建について」（『富山史壇』第126号所収、越中史壇会、1998年）
- 36) 野口安嗣「立山衆徒の出開帳」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要』第11号所収、富山県〔立山博物館〕、2004年）
- 37) 『奉納越之中州立山絶頂寶藏一軸』（巻本）および『奉納一軸寫』（冊本）（雄山神社前立社壇蔵）。翻刻文は『越中立山古文書』（立山鉄道株式会社、1962年）。
- 38) 木倉豊信「立山古文書について」（『越中立山古文書』所収 p 344、立山鉄道株式会社、1962年）
- 39) 齊藤善夫「近世越中立山諸堂の鐘」（『富山史壇』第104号、越中史壇会、1991年）
- 40) 『立山道名所』（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）
- 41) 「立山道名所」（五来重編『山岳宗教史研究叢書17修験道史料集〔I〕東日本編 p 540～543、名著出版、1983年）、また廣瀬誠「立山道名所」（『富山史壇』第49号 p 41、越中史壇会、1971年）、同『立山のいぶき一万葉集から近代登山事始めまで』 p 134～135、シー・エー・ピー、1992年）において内容に言及している。
- 42) 『立山登山案内図と立山カルデラ』（立山カルデラ砂防博物館、2000年）、『特別展 越中の民画』（富山市民俗民芸村、2003年）、『木版文化と立山』（富山県〔立山博物館〕、2012年）
- 43) 福江充「越中立山芦峯寺の由緒書・縁起・勸進記と木版立山登山案内図・立山曼荼羅」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要』第19号所収、富山県〔立山博物館〕、2012年）
- 44) 芦峯寺相真坊本『立山略縁起』表紙に「享保元年の改め記す、相真坊」とある。翻刻文は『富山県史 資料編 I 古代』付録 II 立山略縁起その他 p 29～33所収。
- 45) 『六用集』（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、正徳5年（1715）三ヶ屋五郎兵衛板）
- 46) 米原寛「越中における「摺りもの」文化の事情」（『木版文化と立山』所収、富山県〔立山博物館〕、2012年）
- 47) 日置謙編『加越能郷土辞彙』（金沢文化協会、1942年）
- 48) 久野俊彦「一枚刷り略縁起の形成」（『遊楽と信仰の文化学』、森話社、2010年）
- 49) 朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』（東京堂出版、1993年）
- 50) 竹松幸香「近世後期加賀藩における出版文化の諸相」（金沢大学博士論文、2002年）
- 51) 岩峯寺延命院文書「立山大権現末社修復、出開帳認可状」（壬辰、正徳2年6月11日付）
- 52) 東海道、江戸、鎌倉、日光などを除けば、名所案内・名所図会の版行は、18世紀末である。なお秋里籬島著・竹原春朝画『都名所図会』（6巻・11冊）は、安永9年（1780）の出版で知られ、こうした絵挿入の名所図会が文化・文政期における旅行の爆発的な盛行を生み出した一要因とされる。他方で、原淳一郎氏は都市と寺社の宣伝活動を別個に捉える必要性を提言している。原淳一郎「近世寺社研究の現状と課題」（『寺社参詣と庶民文化』、岩田書院、2009年）を参照。
- 53) 岩峯寺延命院文書「立山雄山神社暨末社書上帳」（明治9年11月付）
- 54) 岩峯寺多賀坊文書「立山諸末社配置図」
- 55) 主な成果として『立山文化遺跡調査報告書』（富山県教育委員会、1970年）、『風土記の丘（信仰遺産）』（富山県教育委員会、1971年）、『富山県歴史の道調査報告書—立山道—』（富山県教育委員会・富山県郷土史会、1981年）を列記しておく。
- 56) 最近の踏査成果として、山本義孝『立山における山岳信仰遺跡の研究』（富山県〔立山博物館〕調査研究報告書、2011年）がある。山本氏の中世立山修験の痕跡確認は、熊野修験との関わりを重視している。また別個の議論として、山麓・山中における石造物の実態把握が成されており、最近では『立山信仰宗教村落—岩峯寺—石造物等調査報告書』（立山町教育委員会、2012年）による詳細な調査報告がある。
- 57) 出版物による名所流布過程については、本稿で触れた山絵図のほか、加賀藩で作成された地誌類が分析材料となる。また道中日記、紀行文といった著者個人の行動記録の他に、名所図会、売薬版画、浮世絵など広範囲の開放性と宣伝性を有する資料にかかる時系列的な分析も求められる。
- 58) 青柳周一「近世の「観光地」における利益配分と旅行者管理体制」（『ヒストリア』第241号、大阪歴史学会、2013年）